

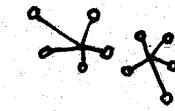
# 東リ演エス

第49号  
1974.10.25

東日本アリズム  
劇団はぐるま内  
岐阜市西野町一  
郵便番号 500-0052

## 創造理念をめぐつて

### 東リ演総会での討議から



第12回東リ演総会は、八月九日、札幌市真駒内青少年会館でひらかれた。開会時の参加は、加盟劇団十七集団のほかオブザーバー三劇団・西リ演の来賓土屋副議長をふくめ、四八名であった。

総会議長団は、若尾正也（演集）塚越松雄（埼芸）両氏。冒頭 黒沢東リ演議長が議案（東リ演ニユース48号に全文掲載）にそい、提案主旨を説明した。

ここには“はじめ”と“劇団総括”をめぐる討論を、われわれの理念をつかめるための資料として、復原した。

#### (1) 質疑応答

早川（仙台小）2頁下段33行に「最近ではむろんそうした健康体をのぞむこと自体が、空想的におもわれる程歪みは大きく、固定している——云々」とあってその歪みを、どう正すかについて、議案はあまり触れていないが、これは実体として歪みがあるのか、又は文学的表現なのか？ 実体とすれば、十分な説明がない。

黒沢 文学的表現ではない。劇団がイキイキしない、仕事に充実感が乏しい、青年層が劇団へ入ってこない、劇団の未来が展望できない等の報告が殆どであり、四日市のように若い人も増え民主的で健康といえる劇団は、例外的だった。常任委員でも、現状をきわめて困難な状況と考えざるをえなかつた。

中沢（京浜）2頁下段9行の栗原論文（演劇会議26号）より引用の「演劇における“地域”原則の課題」ということ、重要な内容だが具体性が乏しくわかりにくい。説明してほしい。

黒沢 ほくの理解では、どんな困難な状態でもそこ

から逃げない、積極的に状況を自らひつかぶってそこに定着しそこでやりとげる、百姓一揆以来の住民自治の伝統が、地域に生きつづけてある筈で、それを地域演劇活動の原則にする、ということだ。

早川 5頁下段(6)項の、観客の問題で、一般市民とあるが、この中に労働者は含まれない、対立する概念としてとらえられているのか？

黒沢 具体的に、レバートリーをみていくと、労働者とその職場を描いた作品は非常に少い。一方で母子を対象にした芝居が増え、一定の成功もおさめている。劇団づくり、観客づくりの上で、青年労働者を引きつけることが今、大切ではないのか。労働者も家庭に居住地に帰れば、一般市民である訳だが、職場の組織された労働者を意識的にぼくらの観客対象にすべきだ、という問題提起している。

久保田（名古屋） “地域に根ざす”理念に対し、大都市の諸劇団にはアンチテーゼなり、別の動きもあるとおもうが、その分析が不足してはいないか？

黒沢 地域での演劇の統一戦線の問題とおもうが、指摘されるように、議案では触れていない。討議の中で話合い、分析して協力関係を発展させる必要があるとおもう。

早川 議案書全体の印象が重くて暗い。一年の活動の中には、評価すべき前進面も多い筈。それをもっと前面に出してほしかった。

若尾 たしかに暗い。内外の状況から、こういう押さえ方になつたとおもうが、討議の中で出し合いたい。

中沢 先の質問ともからむが、議案全体の論調からは既成戯曲にないする若干異った認識、軽視を感じる。路線として創作を重視するのはいいが、既成作品

をやつてゐる劇団は沢山ある訳で、それを名作—安定期線とくくつていいのか。労働者の多い京浜と、他の消費都市、また農村の場合等いろいろの違いがあるだらう。その違いを無視して、創作ということでしめこんでしまつていいか。むしろ、既成戯曲にたいするわれわれのアプローチの仕方を、問題にすべきではないか。

早川 中沢氏の意見に賛成。上演レバをならべて、

どれが多いという数量で、傾向をはかることはできな。その劇団の創造方針と、それが一年どう追求されたかの関連でとらえる必要がある。

塚越 昨年の総会でも、士の会の吉田氏から、レパートリー政策ということで、いまの創造方針と実践總括を結ぶ問題がでた。その関連で発言してほしい。

早川 たとえば去年の総括では、「若者たち」「分裂氣質」「鳩」が多く、劇団で上演されていることを青年劇場の運動の成果、大衆的で民主的な内容に共鳴したからだとして、レパートリーとして大切な今後の方向を示すものだと書いている。これは、今年の評価とかなりくいちがつている。

井岡（静芸） 名作について、各劇団とも一応この議案のようにおさえた上で、やっているのではないのか。名作がいい悪いではなく、やった上でここに出されているような問題と関わってどうだったのか。地域によって立つということと絡めて、どうやったのかを論議すべきではないか。

黒沢 これらの作品がやられる必然性はあるし、それはわかる。それにしても、五〇—六〇年代に歴史と現実のかかわりの中で、創作劇が書かれ上演されて、それがわれわれの独自の旗じるしなってきた。今、それを見わたした中で、この本がいいという選択ではなく、ぼくらの運動をもう一つ見とおしての選定が欠けてはいいか。もっとも必要なものとして、この本になつたのか、心ならずもなのか、その辺の緊張關係を問題にしているのだ。

若尾 ここには「三家福」もあがつていて、演集ではもう二、三年前からやつていて、やつて面白いし、子どもたちに感動与えるしマイナスではない。先頃「銀河鉄道の恋人たち」をやつたときも、前に民芸の舞台を見て違うやり方があると思ったし、そこでやつてみようということになつた。旭川のやまなみでも同様のことやつていて、もつと中味を生かしてつくみたいというのが、ぼくらの願望だつた。ぼくらの観客は労働者というより小市民が多いが、その人たちに原爆の問題、人間の問題としてすなおに受け入れられた。そういう人たちを対象に、作品をとりあげること

も意義あると思つてゐる。劇団として創作が生みだせない、既成作品にたよらざるをえないことは、弱すぎだともうが。

こばやし（はぐるま） 毎年東リ演の総括をやると、一番大きいのがレバの問題だ。これでなければといふ作品、現代の観客要求にこたえられる作品が見当らない苦しみ。東リ演としてどう対処できるかが問題だが、論議が抽象的になり、創造を前進させる役割を果たしきれないもどかしさがある。今年の常任運営委員も、これが最大の問題とおさえたものの、総会でどう実のある論議をおこすかは、率直にいって見当がたたなかつた。専門劇団ですらレバで迷つてゐるのに、いわんや我々が困るのは当然、といつてすまされるのが、そろそろアリズム演劇の立場にたつて、今日の観客要求にどうこたえるかを真剣に考えねばならないだろう。この討議では、各劇団がどういう目的意識でどういう展望をもつてやつてきたのかを、率直に出し、あわないと進展しないのではないか。

塚越 多くの劇団が春の公演の総括をやりおえて出席している筈。その実践とからめて発言してほしい。

和紀（はぐるま） 議案で青年の問題が強調されてゐるが、はぐるまでは「どん底」で意識的に若い人の中へオルクし、動員でも成功したのだが、この芝居が高校生を含めた青年層に共感されたのは、単に名作というようなことではない。本当に良い芝居をキチンと上演することが必要だ。また、「子供劇場でも未開拓の青少年の中へ芝居をもつていき、その堀りおこしの中から、レバのめんでも新しい打開を試みた。あれこれの本の問題より、地域要求にどうこたえるかが大切だとおもう。

萩坂 議案に賛成。たとえば「若者たち」を四日市がやるときいたが、これは青年劇場の創作であつて、その魅力なり鮮度なりは青年劇場がつくつた。よそでやる場合、若尾氏の云うように、俺たちの「若者たち」をつくるんだということが、なければならない。幾つかの舞台をみた限り、そうではない。あれではダメだ。一番美味しく戴けるところだけいただいて。議案でやつてゐる創造上の苦心やきびしさがあるのか。今年諸方で「どん底」がやられているが、なぜ「どん底」をやるのか、その観点がハッキリしない。そして、「どん底」はやるがチエホフはやらない、チエホフは難しいからやれない。「若者たち」はやるが、何かはやれない、そのケシメが自分たちの苦しみとしてつみ重ねられない。はじけてこないし、創作劇を生みだす力もでこない。議案は「若者たち」「イルクーツク物語」のレバとしてのよしよしを論じてゐるのでは

ない。

中沢 既成作品の中味への我々の迫りようの問題として、安全思想があるという指摘なら、この議案に賛成だ。黒沢の発言で、それが既成戯曲だから積極的になれないとあつたが、そうは括りきれない。何も新しいものが生みだせないなら、やめるべきだというのには、当然あつてしかるべきだ。

柘植（名芸）栗木の「サラリーマン物語」は、職場に焦点あわせながら問題を地域にひろげた創作で、比較的好評で秋に続篇を上演する。こういう試みや、弘演研の「西津軽郡車力村」などについて、常任運営委では個別に討議し、そこから新しい芽を見出したり、評価したりする必要がある。

塚越 「若者たち」を最近やつた劇団協同から……：

氏名不詳（協同）「イルクーツク」から「若者たち」とやつたのは、構成メンバーが若いから。その前民話劇をやつてきたが、姿勢のいいものということでお若者たちを選んだ。内容のつかみ方が弱く力不足だったためか、狙つたものが十分観客に理解されなかつた点がある。

久保田 劇団は座付の、しかた作品をずっと上演してきた。作者も若かったし、書くものが劇団の心をそのままうたいあげていたが、だんだん年とって今まで書いたものが本音だったが、作家としてほんとに書きたいものがでてきて、「むくづとモーゼル」や次には戦中の朝鮮を舞台にした作品という風になる。ところが劇団のメンバーは、入れ替つて若いから、自分らの芝居と云いつつピタリしない、ということがある。作家の作業は、皆がこういうものと云つても、そうではないものを持っている。演出としてそれは大事にしたい。同時に作家が書けないと云いつつも、皆のやりたいものをつくつしていく、そのくりかえしの中から創作劇をつくりていきたい、そんな作業を考える。

塚越 関連して、京浜の劇団創作について。

黒沢 「俺たちのペガサス」については、演劇会議

26号で報告した。秋の本公演の「九〇一番船進水」

は、造船所の現場を書くのだが、ぼく一人ではどうにほしがし簡単ではない。ぼくらとしては、上演まで創作グループがねばつて改稿しつづけることで、それだけはハッキリした。一応の線を、ドラマに高める

を保証したいと考えている。

中沢 戯曲がなければつくつてやるという、レバへいの受動性をのりこえる原初的な芽だとおもう。これを

笄にしてぼくらに沁みついた受動性を打破したいとうことだ。結論はやつたあとでないと分らないが。

中沢 そうだ。劇団が総点検をくぐって、存在理由をつかみなおしたいということ。

黒沢 期生の劇団創作をやつて考査したのだが、創作は最低かれらの舞台の水準と同じだということだ。演技に示されるものと同レベルのものが、作品にも出てくる。舞台では、役者は自分の身柄にあつたうまからうと拙かろうとナマ身の自分で、演技するしかない。だのに何故 戯曲だけはよそから借りてきてやるのかに疑問は皆感じない。劇団が力いっぱいとりくめば、舞台と同水準の戯曲は書けるし、それが劇団の創造力量をつくるという点を強調したい。

小坂（中野勤演）基本的に議案を支持する。ぼくらでなければつくれない、観客にこたえる芝居はやはり創作だとおもう。現実的には、書き手が少しし、劇団が創造的にも財政的にも作者を保証できないため、生産が困難だが、ぼくらは芝居やつていてる自分の生活体験とともに、創作劇を書き、それを「長い夜の記録の記録」——「青春をトラックにつんで」という風に、何回も改作上演してきた。しかし、体験レポート的でドラマとして普辺化しない。いま秋にむけて又改作にとりくんでいるが、劇団全員に支持される青春ドラマにするには、大きな力量が必要になる。既成の本でも中野の地に適し、ぼくらが燃えられれば当面とりあげていく。この中で、創作をベースにという目標を実現していただきたい。

氏名不詳（つむぎ座）一〇周年記念に、ブレビトの「肝つ玉おつ母」をやる。一二一三名なので、手づくりの芝居を考え、この戯曲を日本ものに脚色し、小さな稽古場でやる。金を使わず、自分たちに合った形に大作を皆で改作してやるわけだが、こうした中でアマチュア演劇のやり方をさぐっていく。アマチュアリズムというものについて、考えなおす時期とおもう。

以上で第一日の討議はおわり、翌朝は劇団未踏の立川雄三氏から、専門劇団の立場での発言を求めて、スタートした。

### (3) 討 議

立川（未踏）5頁上段に、現状をきりひらこうとする意欲的なアタックが、専門劇団によってなされていて、一般的に安定ムードがあるとされており、その辺を創作問題を中心で報告せよ、ということだが、こ

れは簡単じゃないので、私たち未踏が去年から今年にかけてとりくんだ「平沢計七」を中心いて話したい。これについては、演劇会議27号にも書いたが、あれはご立派だがコジツケもあるので、レバをとりあげて上演にいたる経過を集団とのかかわりでどうするか、自分のコトバで本音を語りたい。

われわれ専門劇団というが、専門とはどういうことなのか。演劇を専門にやるのが、専門的な演劇をやるのか、演劇を職業としていることなのか、かなり曖昧で規定が難しい。専門家たらんとして努力はしているが、业余劇団の専門化しているところより部分的には弱いし、业余に毛が生えた程度ではないかとおもう。全生活をかけ職業化している点では、青年劇場が三分の二位専門劇団といえるかもしない。われわれは専門化したいとおもいつつ、それでメシをくわねばならぬとなると気が重い。だいたい、教育、医療、芸術などというものは、金銭に換算できない仕事だ。芝居でメシをくうとなると必ず矛盾がおこってくる。

どうせどうやつたってスンナリいかない、だつたらやりたいことをやつていこうというのがわれわれの集団の法則だとおもう。特に、誤解されると困るが、オレならオレがやりたいこと、集団の仲間の誰かが強烈にやりたいということをやつていこうじゃないか。それを皆が納得できればいい。納得は妥協ではない。自分が妥協しないばかりか、仲間にも妥協させない、そのことについては、あらゆる手だてるつくす。従つて日常の話合い、生き方や社会への対し方、芝居への考え方を徹底的に話合うことが非常に大切になる。これは専門化していないためにやれている、と云つていいので、スケジュールや旅公演に追われたのでは、集団の理念や方向を、ドッブリのべつ幕なし喋りあって、るなどという状況はつくれない。

徹底した討議の中で、私は自分のやりたいものをまるで皆がテメエでやりたいと思っていた如く錯覚するまで押す。これをやらないと、本ものの納得はできない。こういう集団だから、いろんな企画は出せない、「平沢」に一年かけている、「平沢」を専門に一生けん命やつたといいう点では専門劇団といえる。この場合創造の目標を高くおく。集団は生きものだから、偉そうなことはかり云つてられない現実もある、その足もとはリアルみていく。しかし、集団の条件や能力にあわせて、やれそうなことをやり、あとで辻ツマを合わせるのではなく、ちょっとやれそうもないことをやつしていく。ぼくらの中ではそれを認めあつてある。集団には岡ぬけた才能がいる訳ではない。むしろ何故芝居やるのかといわれそうのが多い。本人がそう思

つてないから教われるが、その構えがすわる迄にも三四四年はかかる。われわれが三流意識のコンプレックスに落ちこまないでいるのは、今日の労働者から、その樂天性から学んだところが多い。

創作劇にどこからとりつくか、それはやりたいもの

をやるということだが、やりたいという以上、それは現状認識から出発している。議案も現状認識について

長々のべているが、ほくらも時折安定ムードに傾斜する、適当にお茶をこしてこちらで少し稼ごう、それは否定できないが、考えなければならぬのは、今日の演劇がどこか大事なものを見失っているのではないか、

ということ。ここに書かれた「人をして震憾せしめる感動」というものを、われわれ自身も失いかけていたから、身のまわりのものろもろに包まれて、怒りを忘れ鬪う姿勢を忘れてはいけない。新劇の前衛性を喪つてはならない。これがわれわれの最も欠落しやすいところだ。外側のできごとではなく、人がいかに生きるべきかを問う必要があるとおもう。その限りでは「どん底」をやるもの意味あるが、われわれは集団のレゾンデートルとして、ひとの轍は踏みたくない。意地でもひとのやらないことをやる。だから名前も未踏とつけた。昨夜の討論をいろいろ考えたが、たとえば画家はひとの繪をかく訳じゃないし、小説家は自分の小説をかく。ぼくも自分の創作劇をやりたい、だから集団を強引に納得させる。観客の要求ということがいわれるが、それは単純ではないし討議の中で深めた、いが、ぼくは自分の最もみたいた芝居をつくりつづける中でそれを探つていくつもりでいる。

據越きのう萩坂氏から厳しくやられた「若者たち」をやつた劇団から、発言ないか。

高橋(青年劇場) 諸方でやられた「若者たち」が青年劇場に太刀打できないのは、ある意味では当然でそうでなかつたら専門とはいえない。しかし比較ではなく、それぞれに積極的な課題と成果があつたのではないか。観客を集めやすいことの他に、演出演技の力をつよくする上で有効なら、いい作品をとりあげて学ぶのはいいことだし、その基盤に創作の可能性も生まれる。また議案は職場を描けと強調しているが、今日は大部分の劇団が地域にあるのだから、機械的に職場を描けとか、一般市民より労働者を対象にといふのは、一面的でないか。

佐々木(演集) 未踏の話 基本的に大切なこととおもうが、五〇人の集団でやりたいものと云つても統一しきれない、妥協が多数決になる。また名古屋市や労働との関係で合同公演が入り、それが優先して劇団の主体が崩れ、いつも追われてレバをきめる。討議を

きいて論理はわかるが、具体的にどうしたらいいかに迷う。もっと意見がききたい。古典やボビーラーな作品は手に入るが、創作劇が入手できない。戯曲の交流や、演劇会議の創作特集を増やしてほしい。

久米(下町) 一二月に「若者たち」をやる、話をしていて怖くなつた。来春創作をということで、若い人たちのサークルの問題をとりあげて第一稿ができ、心をはずませている。レバの問題ではたゞ悩んできたが、何かいいものないから創作へふみきつたのは去年の東リ演総会へ参加して、地域に目をむけるようになつたからだとおもう。

早川 「若者たち」やつたところ、これからやるところ、どういう姿勢でとりくみどういう成果をあげたか、よりかかりだつたか自主的だつたか、まとめを集めて調べてみたい。仙台へ資料送つてほしい。

高桑(中野勤演) 民衆劇場として七年やつてきたが、最初の頃は既成の本だつた。内部のトラブルで五六人に減つてしまつたが、集会へ出演をたのまれ、めいめいで云いたいことやつた。それが「青春をトラックにつんで」へ発展し、一定の評価をうけた。東京ではプロの劇団が毎日芝居をやっていふ、その中では独自なほんらにしかできないものを生んでいかなければ、ダメだ。創作の書き手を、どう保証するかが大きな課題である。

小坂 議案が、ほんらの演劇運動を創作運動だと云いきつているのは正しい。創作は演技を発展させるし、集団も燃えるし、観客との新しい関係をつくる。要是創作と集団の正しい関係を自覚して、観客の高い要求にどうこたえるか、だとおもう。

和紀 高橋氏の意見に賛成。名作に依存するのではなく、近古代に学ぶことが大切だ。それが創作を生む力と結合するので、力のない創作運動では先細りしてしまう。はぐるまは、岐阜の一般市民の劇団だ。母親の要求で子供劇場をやりそれも発展させているが、秋にはこばやしの創作劇を一方でやる。どの芝居でも新しい可能性を追求し、それがつくる側を刺激すると同時に地域に責任をもつことで、劇団の積極的な自覚を強化する。子供劇場や、演集からだらた労演や自治体とのタイアップの仕事についても、議案で前向きに言及する必要があろう。

若尾 レバの問題というより劇団の性格の問題という気がする。演集は創立以来殆ど既成の脚本でやってきた。田口竹男の「文化議員」をページ前に、今やるべき作品としてやつたというように、既成の作品を正しく上演することで、名古屋地域での文化運動の柱になってきた。東リ演がてきて、運動の方向では一致し

たが、創作が主体ということでは必ずしも一致できない。東リ演も加盟劇団が増え、それぞれ地域に責任もつてアリズム演劇のすすめ手になつてゐるが、そこに創作でなければダメときめつけ、肩身のせまいおもいをさせてはいけない。既成の本でも開拓できること深められる問題は充分ある。レバ決定については、立川氏の意見重要だが、創立メンバーと増加する若い人では統一しくいし、これをやりたいというものが出てこない。やろうという説得が好き嫌いの段階に停まつて、つよい主張にならない。十分納得しての多数決ならやむをえないが、そうならない。こういうことでの公演はやつても満足しきれない。これが一番大きい問題だ。

久保田 論義が戯曲—作者中心になつてゐるが、舞台創造に目をむける必要があるはしないか。中野の話一人一人が喋つてイキイキするのは分るが、それが観客の本当の要求とつながるか、飽きられてしまうのではないか。人の書き手にたよる創作運動では、彼が書けなくなればボンヤつてしまつ。もっと演出中心の創造の過程をふくむ舞台の仕事を、中心に考えるべきではないか。名作路線というが、「どん底」と「若者たち」を並べているのもおかしいし、ウェスカーやアメリカ現代作家をどうとらえるかも出でていない。これは東リ演の名作路線でしかない。自分たちのつくった「イルクーゾク」がヤワであるのかないのか、演技や演出の仕事でのたしかめが不足している。子どもの芝居にしても、母親や子どもの要求をキチンとうけとめているのか。自分たちの経験でも、TVよりナマの芝居の方が—という母親が結構いて、幼稚園やとうすと創造について視点をらす必要を感じる。

中沢 去年の総会から地域—自治体との関わりの問題が、大切だとされた。自治体内の闘いにとつて多数を獲得することがきわめて重視され、そこに民主的自治体の存在理由もある。そこで、観客を増大していくことへの評価が、戦闘性の欠如や創作が生まれないことによつて薄められてはいないか。仙台がいかに多数をつかんだかを、もつとつこんでいかないと、二者折衷になつてしまつ。川崎でほんらは、労働者—労働組合の問題を自分たちの生き方とダブルさせて捉える必要があり、ムリは承知で集団創作につづこんでいる。そこどう切り結ぶかと、多数をつかむことを結合させなければならぬが、前段の数の問題を特に大切に考えたい。諸劇団が「若者たち」に、どうとりくんだかのエッセンスを早川氏が調査したい、というのは当

然で、そこを大切にしないといけないとおもう。

塚越 「若者たち」にとりくんでいる四日市から。

氏名不詳（四日市） この一年でメンバーが増えて

活発になつた。今年三月の「キュー・ボラのある町」でふくれあがつた。指導者は四九才で、皆二〇才そこそこ。秋はレバの候補がなくて運営委がもめたが、指導者が「若者たち」をもつてきて、皆やろうときました。若いから冒險したい、指導者を信頼している。

深沢（からっかぜ）去年「分裂氣質」が浜松演劇協の例会になつた。今年二〇周年で「どん底」をやる。ぼくらは、一つ一つ確実につくっていきたいが、冒険もやる。「どん底」をやること、二千の観客をつくることも、地域を拠点にかかる活動の一かんで、けつして安定ムードではない。中野の、自分たちが燃えていいればいいというの、違うとおもう。創作劇が生めないその場合も、それなりの積極性はあるのだ。

黒沢　“われわれの劇団生活の日々のいとなみが、則自動的に東リ演の演劇運動でありますのか”を、この総会では問いかねている。劇団が燃えないといいう歪みがあるから、そこを照射しなければならないのではないか。若尾氏のいう創作劇の出ない弱さは、ぼくらにもある。だから四苦八苦して集団創作を最後の手段にしているのだ。久保田氏の意見は傾聴すべき問題だが、その上で新しい演劇運動のシンボルは戯曲中心にあらわるものであり、それは現況ではないが目標ではあるべきだとおもう。中沢のいう多数の獲得は、総合的な輪廻の上になりたつのであって、一人人間の内部にどう喰いこむかをスキにして、数ばかり増やしても何にもならない。地域にねさすためには、鋭い極をもつて問題提起することだ。どういう爆破力をもつて「若者たち」をやるか、だろう。

千葉（さっぽろ）東リ演を劇団におきかえて討論をきいて、声も出ない感じでいる。専門劇団として立川氏のいう弱点から話合いが不十分だ。太い方向は出るしやられているが、表面的で中味が薄い。東リ演の多くの劇団ともっと話してみたい。劇団と観客との問題に加えて、舞台の上の生活、作品との関係などでもそのつもりだったが、観客の受けとめ方は必ずしもそうではなく、十分総括しきれていない。多くの劇団が「若者たち」をどうおさえるか、ききたかった。

黒沢

昨夜運営委で話合つたが、ぼくらの理念の問

題については、研究集会を提案しているので、秋の公演を経過してその具体的な実践から何をもちこんでいくか、それを課題にしたらいいとおもう。

井岡 理念討議では抽象的な部分も必要だが、現在の問題点をおさえた視点で読むか、否かで同じ戯曲でも全く異ってくる。その視点でスタートし創造方法について出される必要がある。ぼくらは「綿ばこの中の小さな草たち」をつくった。これについて全くフヤけた目からしか見られぬ部分もある。名作が創作かではなく、その視点でたしかめ合いたい。また、具体的に準備する中で、集団のなかの悩みの問題も、どうつくっていくのかの中で大きくてくるし、ぼやけの部分は劇団の中、個々人の中にある、それと関連して理念の討議はやるべきとおもう。

萩坂 ぼくの「若者たち」弾劾は撤回する。あまりにも弊害が多いから。重苦しい政治の討論みたいになつては困る。ここは劇団の会議で、芝居は楽しくやっていいのだから。ただ、楽しさの質は問題にしなければならない。質の高い楽しさ、喜びを追求してこそ、お客様の楽しみも大きくなり、芝居によって人を変えることができる。それが東リ演の理念だとおもう。

以上が主に創造の理念にかかる討議内容

で、総会全時間の半分強にあたる。

このあと“東リ演の活動総括”“ブロック”について“および”活動方針と計画の討議

は、時間の関係でかけ足になつていて。

その中で、事務局についてはひき続き劇団はぐるまに担当してもらうことをきめたが、いかに集中を改善するかーをめぐって、約一時間論義したし、「演劇会議」の内容と拡大に関しても有効な発言が多かつた。特にここでは、仙台小劇場の積極的な発言が全劇団に大きな刺戟を与えた。

もっとも十分な討議を要する筈の“活動方針と計画”が、時間に圧迫されて主旨説明に終わっているのは、残念なばかりでなく、東リ演活動を絵にかいた餅にしてしまう危険がある。

一〇月二六一—二七日、藤沢でひらく常任運営委員会は、これに対する補強と具体化をすめる予定だが、各ブロックにおいても独自に課題を追求する必要があろう。

# 若干の、補足的な……

黒沢 参吉

東日本演劇フェスティバルがおわり、帰宅してホツと一息ついたころから体調があかしくなり、何をするのもオッケウで秋の公演の本の改訂も、机の上にひらいたきり一字も書けず、八月末重い腰をあげて病院へいったら、これは帯状風疹だといわれた。

上半身左側の胸と背と腕の皮膚に、風邪ひいたとき

の逆なでされるような悪感があるのが特徴で、微熱もあつてダルい。もらつてきた薬をのむと胃がひどく重くなり、それがつらいと訴えたら、あの薬はキチンキチンとのまない方がいい——まじめな顔で医師が言った。五六年以前、この病氣にかかつたという劇団員のDは、電話口で、タイジ・ヨウホーリンだつて？それじゃ、ひと月はかかりますよ！と嬉しそうに宣告した。新聞の家庭欄か婦人欄に、子供の三日ハシカと同様ヴィールスによる疾患で、ビタミンOを多量に摂取せよとでいたので、青いミカンとレモンを顔中すっぽくして食べづけた。なおりぎわに、ごていねいに風邪をひいたりして、結極常態に戻ったのは九月の下旬だった。

この時期の空白一ヶ月余は被害甚大で、たまりにたまた仕事をどうにか処理するのに、又ひと月かかる。総会の中味を伝えるこのニュースの発行が、胸算用より著しく遅れたのも、それらの仕事のあとに廻るしかなかつた事情による。諸方から、いろいろ通信をいただきながら、クにご返事できなかつたのも同様のこと、何分ご容赦ねがいたい。

ところで、この二ヶ月あまりのうちに、東リ演総会での討議の中味と重なつて、考えさせられたり胸におちたりする経験が、いくつかあつた。

中野勤労者演劇協議会の演劇学校の生徒諸君が、卒業公演でやつた「明日をよぶ娘たち」の舞台も、その一つだった。ぼくはこの舞台を、劇評をかく必要からみたある専門劇団の公演のすぐあとでみたのだが、どちらに芝居の魅力を感じたかといえば、それはためらいなく芝居をやりはじめて半年足らずという、中野の生徒諸君の舞台の方にあつた。

こういう発言にはたとえば、ものによつては玄人より素人の方がイキイキした芝居をやるものだ、とか素材そのものの面白さは一回や二回の舞台では生きるが、それは偶發的ないので眞の創造とはいえない、と

か反論までわかつてしまつていて、だからこんなことはやたらに喋らない方が賢明だと思ふ。とにかく、この「明日をよぶ娘たち」は八月一〇日に真駒内でみた劇団河童の「ある遅い出発」と共に、ぼくらの芝居の原点（このコトバも少々垢じみてきたが）を考える手がかりになつた。

演出の飯田信之君が、どういうやり方をしたのか、ぼくには細かいことは分らないが、役への斬りこみを必ず裸の自分じしんからしなさい、役の分析というのは結構自分じしんの分析なんだよ、分らなくなつたりやれないときはスタートラインの自分じしんの中へもう一度戻つてごらん、ありあわせのものやひとつ借りものじゃダメ、貧弱でも何でも自分じしんのものを使うことだよ、といったことを、細い目をシバシバさせながら、くりかえしまきかえしやつたんじゃないかな、と舞台をみておもつた。

よくやろう、見せようという意識がミジンもない、というより、それどころではない、自分と役——自分と虚構の世界のわき目もふれないと格闘が、見た目には素気なく不愛想なタセに、もう一つ芝居小屋の同じ屋根の下の観客を、見あげも見おろしもしない自然さで信頼しきっている。そののびやかな緊張関係の中で、観客はたのしみ、笑い、手をうち、共感の涙をぬぐつてゐる。それは、芝居というより、どこか室内競技の空氣に似ていた。

この中で、オルグの役をやつた小坂忠君の芝居はよくなかった。本人にも云つたことだから書くが、それは水と油で、必死に生きようとしている生徒たちの中へ、かれは手ぶらで入つていつた。手もちのもので間に合うという思いあがつたゆとりが、かれにはある。きいた範囲の何人かが、ぼくと同意見だった。あとで、お前は薄汚なかつたぞ、といったらかれは首をすくめて舌を出して、つまり彼の流儀で非を認めた。実はあれは、澄んだ水の上の1滴の油だから誰の目にも異質にうつつたが、ぼくは、ぼくらの芝居の多くに、あの薄汚ないものがヘドロのように沈没して、イキキした創造を窒息させているかにおもわれてならない。萩坂氏が総会で言った『樂しさの質』というの、実はヘラヘラ笑つてなどいられない、気の遠くなれるような無限大の課題ではないのか。

立川の劇団協同に一晩よばれて話をした。ほくらの

地域で労働しながらの芝居のメリット、あるべき優位性といったことを話した。

その後、総会議案書をよんだとき、「力量にみあつた活動をしている劇団の一定の安定」を否定していることに反発を感じたが、今夜の話で否定の意味が自分なりに分った——という発言がキッカケで、昨秋の「イルクーツク物語」から今春の「若者たち」のとりくみについて、劇団員諸君からきいた話は非常におもしろかった。

といつてもそれは、特別なことではなく、単純にいつてしまえば、「イルクーツク」では、自分（自分たち）の生き方とかかわってワーリヤがあり、ヴィクトルがあり、そこからどうしてもやりたいと火がついて、できるかできないか分らないので青年劇場に援助も求め、必死のおもいでやったから全員に充足感がのこった。「若者たち」では、その成果に頼れるおもいが云わざ語らず全員にあった上、本と自分との緊張関係よりこれは地域の若い人たちに受けいれられる筈といつた自分をヌキにした基準で選び、青年劇場の協力もふくめてもろのこととが、「イルクーツク」の延長線で実行されたが、まずやりおえたの充実感が殆どなく全体の成果も昨秋に及ばなかつた。というほどのことであった。

立川から帰る南武線の長い車中でぼくは、仙台の立川君が総会のどこかで、「東リ演の劇団は、もっと困ったこと迷ったこと、自分たちの恥部をさらけ出さないと本当の交流、学びあいはできない」という主旨の発言をしたのをおもいだした。その夜、協同の諸君はそれをさらけだしてくれた訳だが、これは逆にいえば劇団協同の今日の健康性と自信をみせてくれた、ということでもある。

同時に、協同が「若者たち」にとりくみはじめてから公演まで、更にいえば総括作業中さえ、自分たちの潜入っている状況を客観的に正確にみることは、殆ど不可能だったのではないことがある。いくつかの兆しはあつたとしても、それは軌道修正でのりきれると考えられるし、事実そうしてのりきるしかないのだ。ただ困るのは、当面をのりきるために軌道修正が、劇団の固定した体質になることである。

「イルクーツク」のとりくみの真摯さ、新鮮さを、「若者たち」のものにするためには、軌道修正ではない、一度断絶しての全く新規なスタートが必要だったという協同の反省は、一見あたりまえな分りきつたことのようでいて、現実には、垢をこそげ落とすために血を流す程の純潔性を必要とする。健康性や自信のバ

ロメーターは、このきびしい純潔性にある。

創立一〇〇年、二〇〇年という劇団がほくらのまわりに増えている。しかし、意地わるくいえば劇団が重ねた年輪などには、博物学的な価値はない。過去を誇つて何になろう。二〇〇年たつても三〇年たつても、若さを失わずピタリ現代と対応しているとき、劇団はその創造性の優越性を誇ることができる。

戸塚の四疊半の部屋に坐つていて、その劇団のことが比較的よくわかる劇団がある——などと、気どつた云い方をしなくてもいい。

便り、公演案内、台本その他を送つてくれる劇団のことは、そうでない劇団より、よくわかるし親しみも深い。中部ブロックの劇団のことは、栗木君のマメなニュースで、中部の仲間と同じ速さで伝わつてくる。三重の劇団のことは、三劇協ニュースに日をとおすとほぼわかる。劇団でマメなのは四日市市民劇場。たいがい森君の手紙が一緒で、若い人が増えての活況を嬉しそうに知らせてくる。

青年劇場の団内向ニュースと、未踏の機関紙「未踏」は、東リ演の専門劇団の志向―活動を知る上でぼくには貴重な内容である。はぐるま、群馬中芸の機関紙は共に活版だが、前者は歯切れよスマートで、後者は欲ばつた理論派である。未加盟の劇団では、柄木のさつぱと藤沢の湘南アートシアターが、キチシキチンと送つてくれる。

さいきん、その中へ仙台小劇場が加わってきた。そしていえば、総会のとき早川君が、劇団の印刷物一切を事務局と演劇会議発行所と議長あてに送ることにしたから、と云つていたのを思いだしたが、つまりそういうことなのである。

第一便是、北海道の感想集（これは、四日市からも同じ趣きのものが送られてきたが、それぞれ興味ぶかく読んだ）と、九月一四一五日の東北Bゼミナールの予告で、第二便是、このゼミの記録と「牛鬼退治」公演の各ジャンルの総括であった。これを丹念に読んでいくと、自分が仙台小劇場の劇団員でないまでも客員位になつた錯覚をおこしかねない。

ぼくは、かつてこういう全印刷物の交換を劇団間でやろうと提案して、結構実現しなかつたが、そういう方法ではなく、例えばどこの劇団が自分のところの資料を仙台へ送つて、かわりにそつちのをくれ、といった取引がはじまらないだろうか、という期待をもつていて。なかなか煩雑だろうが、やればできることがだし、やる值打の十分あることだ。

電話のついでに、そういう求めがあつたら応じるかと訊いたら、欣んで応じると早川君はこたえた。